

ゴート語聖書ルカによる福音書第2章第3節の in seinai baurg 等は方向を表す位格の名残か

下寄 正利

Wolfgang Krause は Handbuch des Gotischen において、次のように述べている。

Rein lokal wird der Dativ des Ortes gebraucht. Seine Herkunft von dem Lokativ zeigt sich besonders in Fällen wie: *jah iddjedun allai..... hvarjizuh in seinai baurg* “Und es gingen alle....., ein jeglicher in seine Stadt”(aber in der griechischen Vorlage εἰς τὴν ἰδίαν πόλιν) L. 2, 3. Der alte Lokativ konnte nämlich auch auf die Frage Wohin? antworten. Daneben kann im Gotischen aber auch in + Akk. verwendet werden, z. B. *gagg in heþjon þeina* “geh in dein Kämmerlein” M. 6, 6. — Anders Streitberg, Festschr. Windisch (1914) 217 ff. ¹⁾

インド・ヨーロッパ祖語において、位格は位置、時点を表すのが主たる機能であったが、それと並んで方向を表す機能も具えていた²⁾。方向を表すには対格も用いられ³⁾、またむしろそちらが普通であったが、対格と位格の間には、前者が単に目標への移動を表し、目標に到達したかどうかについては何も述べないのに対し、後者は目標への到達を表すという違いがあったとされる⁴⁾。だが方向を表すのに位格は次第に用いられなくなり、また位格という格そのものも他の格に吸収・統合されていくことになる。ゴート語の属するゲルマン語派の場合、位格が与格に統合されたということは確かなことであるが、果たして L. 2, 3 等の用例は、古風な方向の位格の名残とみなすべきものなのであろうか。

W. Krause もあげているように、W. Streitberg は、ゴート語において方向の補足成分が用いられるべきと思われる所で時として位置の補足成分 (W. Krause の考え方だと位置の補足成分と同形の方向の補足成分) が現れる現象について、異なった説明を行っている。W. Krause があげているのは、W. Streitberg の Zur gotischen Grammatik という論文の中の 1. *qiman in* und Verwandtes とい

う部分である。タイトルが示す通り、これはゴート語の移動を表す動詞の中で最も位置の補足成分との結合が顕著な *qiman* を中心として⁵⁾、移動を表す動詞における位置の補足成分の出現の問題を扱ったものだが、そこで彼は次のように述べている。

Daß die Ruhekonstruktion bei *qiman* wesentlich häufiger ist als die Richtungskonstruktion, befremdet nicht: *qiman* ist ein **perfektives Verbum** d. h. es bezeichnet die Handlung **im Hinblick auf den Moment ihrer Vollendung**. Wie ich IF. 27, 153 gezeigt habe, neigen aber im Gotischen manche perfektiven Verba dazu, im Gegensatz zu den entsprechenden imperfektiven Bildungen die Ruhekonstruktion vor der Richtungskonstruktion zu bevorzugen.⁶⁾

また W. Streitberg は、移動動詞において方向の補足成分と位置の補足成分がどのように使い分けられるかについても述べているが、これについては、上記論文では *qiman in* がどのような場合に与格と、どのような場合に対格と結び付くかという形の記述になっているので⁷⁾ (もちろんそこで述べられていることが *qiman in* だけでなく他のケースにも当てはまることはこの論文を読んでもみれば明らかなのだが)、位置の補足成分を取りうる移動動詞全般について述べた形になっている *Gotische Syntax (Gotisches Elementarbuch)* における記述の方をあげておくことにする。

Bei den Verben des **Fallens, Säens, Setzens, Legens, Kommens** u. ä. herrscht im Got. vielfach das Verhältnis der **Ruhe**, nicht wie im Nhd. das der **Richtung**, und zwar ist dies immer dann der Fall, wenn es im Zusammenhang **lediglich** auf den Augenblick der Vollendung ankommt. Wo aber **neben diesem auch die Bewegung** in Betracht kommt, wo sie in das Blickfeld des Sprechenden tritt, muß auch im Gotischen die **Richtung** ausgedrückt werden. Besonders zahlreich sind naturgemäß die Ruhekonstruktionen in der Vergangenheit: die Handlung ist abgeschlossen, die Aufmerksamkeit richtet sich daher vor allem auf den Augenblick der Vollendung.⁸⁾

W. Streitberg は移動動詞と結び付いた位置を表す形をした補足成分は、W. Krause が考えているように方向を表しているのではなく、その形が示す通りまさに位置を表しているのであり、その使用は完了相という動作態様から発した

動詞の特殊な用法に起因するものであるとしているわけであるが、彼の行っている説明の妥当性は別としても⁹⁾、いずれにせよ位置の補足成分が現れる原因を動詞の方に求める考え方は、古い方向の位格の名残を仮定するよりはるかに説得力があるように思われる。というのも、まず一つには、ゴート語の移動動詞は与格・対格の前置詞 + 与格だけでなく、*faura, nehva, at* + 与格や位置を表す副詞を補足成分としていることもあり、従って、移動動詞と結び付いた位置を表す形をした補足成分の問題は、単に与格の用法の問題としてのみ捉えたのでは明らかに不十分であり、位置の補足成分と方向の補足成分の対立という観点から考察していく必要性があるからである。

J. 6, 44 *ni manna mag qiman at mis, ...*

J. 6, 25 *rabbei, hwan her qamt?*

Mc. 9, 20 *jah brahtedun ina at imma.*

J. 11, 34 *hvar lagidedup ina?*

またすべての移動動詞が位置の補足成分を取りうるわけではなく、特定の動詞に限定されており、ある種の動詞ではしばしば、またある種の動詞ではほとんどの場合、位置の補足成分が現れているのに対し、ある種の動詞は常に方向の補足成分を取っている¹⁰⁾。こうした動詞による差異は、何にも増して位置の補足成分の出現の原因がそれを支配している動詞の特殊な意味・用法にあることを強く示唆していると言えよう。

だがそこで問題となってくるのが L. 2, 3 のような事例である。位置の補足成分との結びつきについては移動動詞によりはっきりとした差異が見られる中で、専ら方向の補足成分とのみ結び付いている *gaggan* が L. 2, 3 でのみ位置の補足成分を取っているのは非常に奇異であり、とりわけ W. Streitberg の考え方に従うならば、到着の瞬間を表す *qiman* と異なり、*gaggan* は目標への移動の過程を表す継続相動詞であり¹¹⁾、決して位置の補足成分を取り得ない動詞のはずである。W. Krause 自身ははっきりとは何も述べていないが、彼が *qiman* や *gasatjan* などの用例ではなくまさに *gaggan* の用例をあげているのには、W. Streitberg への反証としての意味合いがあるものと見てよかろう。

だがそもそも *in seinai baurg* は *gaggan* の補足成分なのであろうか。W. Krause は L. 2, 3 を中略した形であげていたが、それを略さずに完全な形であげると次のようになる。

jah iddjedun allai, ei melidai weseina, hvarjizuh in seinai baurg.

(καὶ ἐπορεύοντο πάντες ἀπογράφεσθαι, ἕκαστος εἰς τὴν ἰδίαν πόλιν.)

これを見ても、W. Krause は副文の部分を省略しており、動詞は *gaggan* のみではなく *melidai wisan* も有ることが分かる。もしゴート語のテキストだけを読むならば、*in seinai baurg* は *melidai wisan* の添加成分と解するのが自然であろう。そうした場合、*gaggan* の補足成分が表面上現れていないことになるが、このことは、文脈から自ずと *in seinai baurg* という補足成分が補われるので、*in seinai baurg* を *melidai wisan* の添加成分とする上で何ら支障はきたさない。このように解釈すると、*in seinai baurg* は位置を表しているのであり、与格・対格支配の前置詞¹²⁾における格の使い分けの規則から何も外れていないことになる¹³⁾。

ただ一つ問題になるのは、ギリシア語の原文が ἐν τῇ ἰδίᾳ πόλειではなく εἰς τὴν ἰδίαν πόλινとなっていることであろう。だがこれも次のように説明することができよう。

新約聖書ギリシア語では既に ἐν と εἰς の区別が曖昧になり始めており、ἐν が用いられるべきところで εἰς が用いられ、逆に εἰς が用いられるべきところで ἐν が用いられる現象が観察される¹⁴⁾。この内、前者の方がより頻繁に起こっており、時代が下って現代ギリシア語では ἐν は εἰς に完全に吸収されもはや用いられなくなってしまっている。新約聖書で εἰς が ἐν の代わりに用いられている例としては、例えば次の箇所をあげることができる¹⁵⁾。

Mc. 10, 10 Καὶ εἰς τὴν οἰκίαν πάλιν οἱ μαθηταὶ περὶ τούτου ἐπηρώτων αὐτόν.

L. 9, 61 πρῶτον δὲ ἐπίτρεψόν μοι ἀποτάξασθαι τοῖς εἰς τὸν οἶκόν μου.

L. 11, 7 καὶ τὰ παιδιά μου μετ' ἐμοῦ εἰς τὴν κοίτην εἰσίν.

このため、翻訳の際にはギリシア語の εἰς + 対格が方向を表しているのか位置を表しているのか文脈にあてはめて考え、もし位置を表していると判断されるならそのように修正する必要性が出てくる。上であげた Mc. 10, 10 と L. 9, 61 もゴート語翻訳では *in* + 与格に改められている¹⁶⁾。

Mc. 10, 10 jah *in garda* aftra siponjos is bi þata samo frehun ina.

L. 9, 61 iþ faurþis uslaubei mis andqıþan þaim þaiei sind *in garda meinamma*.

これらの例では、εἰς + 対格は位置を表しているものと一義的に解釈できるが、しかしながら場合によっては2通りの解釈が可能となることもある。L. 2, 3

は、まさしくそのような事例の一つといえる。この箇所の場合、ヨセフとマリヤが向かった場所も自分たちの町(seina baurgs)なら、住民登録を行う場所も自分たちの町である。従って、εἰς + 対格はπορεύεσθαιと結び付けて考えることもできるし、ἀπογράφεσθαιと結び付けて考えることもできる。更に L. 2, 3 では、ギリシア語のἀπογράφεσθαιという受動の不定詞が迂言的動詞形態を持つ ei melidai weseina という副文で訳されており、問題の文成分が gaggan から引き離される形になっている。そのため Wulfila には、離れた所にある gaggan よりもすぐ近くにある melidai wisan との結びつきの方がより強く、あるいは専らそれのみが意識され、εἰς τὴν ἰδίαν πόλινを in seinai baurg と訳したのではないかと考えられるのである。

また非常に興味深いことに、古高ドイツ語 Tatian でも対応する箇所でゴート語聖書と同様、方向の前置詞句が位置の前置詞句で訳されている。

Tatian a 5,11 inti fuorun alle, thaz biiâhin thionost *in sinero burgi*. (et ibant omnes ut profiterentur singuli *in suam civitatem*.)¹⁷⁾

専ら方向の補足成分と結び付くゴート語の gaggan と古高ドイツ語の faran が、共に全くの偶然から、聖書の同一の箇所を訳した部分で他では例の見られない位置の補足成分との結合を示しているという可能性は、移動動詞と位置の補足成分の結合の原因を動詞の特殊な用法に求めるにせよ格の古風な用法に求めるにせよ、まず考えられないと言ってよかろう。ゴート語聖書と古高ドイツ語 Tatian とのこの奇妙な一致は、この箇所それ自体の中に位置の表現を出現させる誘因が潜んでいるものと考えざるを得ない。すなわち、ゴート語の聖書と同様、古高ドイツ語 Tatian でも前置詞句が副文により faran から隔てられている構造になっており（この場合ラテン語も同じ構造）、そのため訳者には faran よりもより近くにある bijëhan とのつながりの方がより強く意識され、in sina burg と訳すべきところを in sinero burgi と訳してしまったと考えるのが自然であろう。ただし、中世ラテン語では奪格・対格支配の前置詞により形成される位置の前置詞句と方向の前置詞句の区別が曖昧になってきてはいるものの¹⁸⁾、それが Tatian の訳者が in suam civitatem を in sinero burgi と訳す上で影響を及ぼしているのかどうかは不明である。

L. 2, 3 以外で問題となってくるのは、あと frawilwan の用いられている Th. 4, 17 と usgaggan の用いられている Mc. 7, 19 の 2 例ぐらいのものであろう¹⁹⁾。

Th. 4, 17 þaþro þan weis þai libandans, þai aflifnandans suns mip
 imma frawilwanda in milhmam du gamotjan frauþin in
 luftau..... (ἔπειτα ἡμεῖς οἱ περιλειπόμενοι ἅμα σὺν αὐτοῖς
 ἀρπαγησόμεθα ἐν νεφέλαις εἰς ἀπάντησιν τοῦ κυρίου εἰς
 ἀέρα·)

in luftau が与格なのか対格なのかはつきりしないが、もし対格だとすると何も問題は無いことになる。もし与格ならば、L. 2, 3 と同様の説明ができよう。すなわち、ギリシア語の前置詞はἐνとの区別が曖昧になり始めているεἰςである。in luftau と frawilwan との間にはこの場合不定詞句が入り込んでいる。in luftau は、frawilwan の補足成分としてではなく gamotjan の添加成分として解しても文の意味は通る。訳者は in luftau は離れた所にある frawilwan ではなく、より近くにある gamotjan と結び付くものと解釈したと考えられるのである²⁰⁾。

Mc. 7, 19 unte ni galeiþiþ imma in hairto, ak in wamba, jah in urrunsa
 usgaggiþ, (ὅτι οὐκ εἰσπορεύεται αὐτοῦ εἰς τὴν καρδίαν,
 ἀλλὰ εἰς τὴν κοιλίαν, καὶ εἰς τὸν ἀφεδρῶνα ἐκπορεύεται)

この場合は、方向の補足成分を用いて表現することも、位置の補足成分を用いて表現することも可能である。ギリシア語の前置詞はこの場合もεἰςである。Wulfila には、位置の添加成分の形で訳した方がゴート語としてより自然に感じられたのだろう。

移動動詞と位置の補足成分の結合を特定の動詞の特殊な用法に起因するものとする上で問題となる用例は、以上のようにどれも方向の位格の名残を仮定することなく説明でき、また恐らくそれが正しい解釈であろう。移動動詞がなぜ位置の補足成分を取るかを考える際、これらの例は、位置の補足成分との結びつきが頻繁に見られる動詞、あるいは位置の補足成分を用いるのが原則である動詞とは切り離して別の現象として扱うべきであり、またゴート語に古風な方向の位格の名残が存在していることを証明するための反証例ともなり得ないと言えよう。

註

- 1) W. Krause (1968), 144 頁
- 2) H. Krahe (1972), 101~102 頁、M. Meier-Brügger (2000), 256~257 頁を参照のこと。なお H. Krahe はこの箇所、ゴート語には触れていないものの、方向を表す位格の名残として Schiller の作品から sich setzen が auf + 与格を補足成分としている例をあげており、これは W. Krause と同じ考え方とみなしてよかろう。
- 3) ゲルマン語においては、方向を表すのに前置詞を伴わない属格が用いられることもある。O. Behaghel (1923), 587 頁、H. Krahe (1972), 79 頁、W. Krause (1968), 141 頁、W. Streitberg (1981), 24 頁、W. Wilmanns (1967 (1909)), 542 頁を参照のこと。なお方向を表す属格は他の語派においても見られることがあり、H. Krahe はギリシア語の、O. Behaghel はアヴェスタ語の例をあげている。
- 4) M. Meier-Brügger (2000), 上掲の箇所を参照のこと。
- 5) *qiman* は 93 例が位置の補足成分と結び付いているのに対し、方向の補足成分と結び付いているのはわずか 8 例である。
- 6) W. Streitberg (1914), 217 頁
- 7) W. Streitberg (1914), 219 頁では次のように記述されている。

Wir können also den Unterschied zwischen den beiden Konstruktionsmöglichkeiten folgendermaßen definieren: wo es im Zusammenhang lediglich auf den Moment der Vollendung ankommt (und das ist für das Sprachgefühl des Goten die Regel), wird *qiman* mit *in* und dem **Dativ** verbunden; wo aber für den Zusammenhang neben dem Moment der Vollendung auch die **Bewegung** in Betracht kommt, wo sie ins Blickfeld des Sprechenden tritt, steht bei *qiman in* mit dem **Akkusativ**.

- 8) W. Streitberg (1981), 26 頁
- 9) J. Grimm は、位置の補足成分の出現に対して動詞の特殊な用法にその原因を求めながらも、W. Streitberg とは異なった見解を示している。もっとも J. Grimm の場合、位置の補足成分を取るあらゆる種類の動詞を網羅しているわけではなく、また取り上げられてはいてもなぜ位置の補足成分が用

いられるのかは不明とされている動詞もある。原因が示されている場合でも、述べていることが不明瞭であったり、明らかな誤謬を含んでいることもある。J. Grimm (1989 (1898)), 967 頁以降を参照のこと。筆者自身もまた、修士論文「ゴート語の与格・対格支配の前置詞における格の用法に関する一考察」において移動動詞と用いられる位置の補足成分の問題を論じたことがあるが、そこでは、*verba veniendi* と *briggan* については W. Streitberg が考えているのと同様の理由で、その他の動詞については古典語の含蓄構文のように行為の結果の状態までをも含んで表しているために位置の補足成分が用いられているのではないかという見解を示した。しかしながら、この論文が必ずしも満足のものではなかったことに加え新たな疑問も湧いてきており、将来自分なりに納得のいく結論が得られたら再度論文の形にまとめてみたいと思っている。

- 10) 前者のグループに属するのは、次の動詞である。

qiman, mibqiman, gaqiman sik, briggan, lagjan, galagjan, satjan, gasatjan, mibgasatjan, anahnaiwjan, anakumbjan, gatimrjan, anatumrjan, gasuljan, straujan, ufstraujan, ushulon, gadriusan, atdriusan, saian, insaian

これらの動詞はすべて完了相動詞であるので、位置の補足成分の出現について動作態様が何らかの形で関わっていることは確かであろう。またこれらは、*verba veniendi*、*briggan*、広い意味での *verba ponendi*、*verba cadendi*、*verba serendi* (これは *verba ponendi* に入れられるかもしれない) にまとめることができよう。この内、(mib-)qiman と *briggan* は、位置の補足成分を用いるのが原則となっている。なお、in + midjis と in + miduma は、動詞が何であれ、位置を表すときも方向を表す時も常に in midjaim, in midumai という形になる。これらの例は当然ここでの考察の対象から外している。

- 11) W. Streitberg (1914), 223~224 頁において *gaggan* がそうした動詞として扱われている。またゴート語の移動を表す自動詞の類義語論的研究書である Ernst Götti (1974) においても同様の見方がされている。*gaggan* の項及び第 9 章 Die Struktur des Wortfeldes Bewegungsverben を参照のこと。
- 12) 正確には in は属格・与格・対格支配の前置詞であるが、属格と結び付く in は wegen の意味で、空間的な意味で用いた場合、in は与格と対格としか結

び付かない。

13) E. Schulze の辞書でも、L. 2, 3 は *gaggan* が前置詞句と結び付いた用例としては扱われていない。

14) Fr. Blass/A. Debrunner (1990), 167 頁及び 177~178 頁、N. Turner (1963), 254~257 頁を参照のこと

15) 逆に *ἐν* が *εἰς* の代わりに用いられている例としては、次のような例がある。

L. 9, 46 *Εἰσηλθεν δὲ διαλογισμὸς ἐν αὐτοῖς,.....*

ちなみにゴート語訳では、方向の補足成分に直されている。

galaip þan mitons in ins,.....

16) L. 11, 7 については、写本が残されていない。

17) Tatian からの引用には A. Masser (1994) ではなく、E. Sievers (1961) の方を用いている。

18) 国原吉之助 (1986), 65 頁

19) W. Wilmanns (1967 (1909)), 693 頁では、L. 3, 20 (W. Wilmanns は L. 3, 30 としているが、これは誤り) の *galukan* と J. 6, 24 の *gasteigan* の用例があげられている。

L. 3, 20 *jah galauk Iohannen in karkarai. (καὶ κατέκλεισεν τὸν Ἰωάννην ἐν τῇ φυλακῇ.)*

J. 6, 24 *þaruh þan gasaþ managei þatei Iesus nist jainar nih sipon-jos is, gastigun in skipa..... (ὅτε οὖν εἶδεν ὁ ὕχλος ὅτι Ἰησοῦς οὐκ ἔστιν ἐκεῖ οὐδεοῖ μαθηταὶ αὐτοῦ, ἐνέβησαν εἰς τὰ πλοῖα.....)*

しかしながら、この 2 つの例はどちらも問題とはならない。まず *galukan* の方から述べると、「閉じ込める」という概念はそもそも位置の概念とも方向の概念とも結び付きうるもので、原文のギリシア語でも *ἐν* + 与格が用いられているし、現代ドイツ語の *verschließen* も専ら位置の補足成分と結び付いている。*gasteigan* の例の方は、ギリシア語の原文をみればわかるとおり、*skipa* は単数与格ではなく、複数対格の誤りである。

20) 手元にあったいくつかの聖書翻訳を見てみたところ、*εἰς ἀέρα* を動詞の *ἀρπάζεσθαι* と結び付けて訳しているものと名詞の *ἀπάντησις* と結び付けているものの両方があった。このように実際に 2通りの解釈が存在しているということは、本論で述べていることを更に補強していると言えよう。

εἰς ἀέραを動詞のἀρπάζεσθαιと結び付けている翻訳

ラテン語

deinde nos, qui vivimus, qui relinquimur, simul rapiemur cum illis in nubibus obviam Domino in aera, (Eberhard Nestle, Kurt Aland u. a. (1979))

ドイツ語

Danach wir, die wir leben und übrigbleiben, werden zugleich mit ihnen hingerückt werden in den Wolken, dem Herrn entgegen in die Luft, (Die Bibel. Deutsche Bibelgesellschaft. 1984 Stuttgart.)

オランダ語

daarna zullen wij, levenden, die achterbleven, samen met hen op de wolken in een oogwenk weggevoerd worden, de Here tegemoet in de lucht, (Bijbel. Nederlands Bijbelgenootschap. Haarlem 1981.)

オランダ語

daarna worden wij die nog in leven zijn, samen met de verrezenen weggevoerd op de wolken in de lucht om de Heer te ontmoeten. (Groot Nieuws Bijbel. Nederlands Bijbelgenootschap. Haarlem 1997.)

εἰς ἀέραを名詞のἀπάντησιςと結び付けている翻訳

デンマーク語

derefter skal vi, som lever og bliver tilbage, bortrykkes tillige med dem i skyerne for at møde Herren i luften; (Bibelen. Danske bibelselskab. København 1985.)

英語

Then we who are alive, who are left, will be caught up in the clouds together with them to meet the Lord in the air; (The Holy Bible. New revised standard version. American Bible society. New York 1989.)

英語

then we who are living at that time will be gathered up along

with them in the clouds to meet the Lord in the air. (Good News Bible. Today's English version. American Bible society. New York 1993.)

フランス語

ensuite, nous qui serons encore en vie à ce moment-là, nous serons enlevés avec eux au travers des nuages pour rencontrer le Seigneur dans les airs. (La Bible. Alliance biblique universelle. 1997.)

ウェールズ語

ac yna byddwn ni, y rhai byw a fydd wedi eu gadael, yn cael ein cipio i fyny gyda hwy yn y cymylau, i gyfarfod â'r Arglwydd yn yr awyr; (Y Beibl Cymraeg Newydd. Cymdeithas Y Beibl. Swindon 1988.)

日本語

それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い…… (聖書、日本聖書教会、東京 1983)

聖書中の箇所を示す際に用いた略号

J. ヨハネによる福音書

L. ルカによる福音書

Mc. マルコによる福音書

Th. テサロニケ人への第一の手紙

W. Krause (1968)からの引用における M. はマタイによる福音書

参考文献

Behaghel, Otto: Deutsche Syntax. Bd. 1. Heidelberg 1923.

Blass, Friedrich/Debrunner, Albert: Grammatik des neutestamentlichen Griechisch. Bearbeitet von Friedrich Rehkopf. 17. Auflage. Göttingen

- 1990.
- Götti, Ernst: Die gotischen Bewegungsverben. Berlin/New York 1974.
- Grimm, Jacob: Deutsche Grammatik. Bd. 4. 2. Teil. 2. Nachdruck der Ausgabe Gütersloh 1898. Hildesheim 1989.
- Krahe, Hans: Grundzüge der vergleichenden Syntax der indogermanischen Sprachen. Innsbruck 1972.
- Krause, Wolfgang: Handbuch des Gotischen. 3., neubearbeitete Auflage. München 1968.
- Kühner, Raphael/Gerth, Bernhard: Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache. 2. Teil. 1. Band. Unveränderter Nachdruck der 3. Auflage. Hannover 1992.
- Masser, Achim: Die lateinisch-althochdeutsche Tationbilingue Stiftsbibliothek St. Gallen Cod. 56. Göttingen 1994.
- Meier-Brügger, Michael: Indogermanische Sprachwissenschaft. 7., völlig neubearbeitete Auflage. Berlin/New York 2000.
- Nestle, Eberhard/Aland, Kurt u. a. : Novum Testamentum Graece et Latine. 26. Auflage. Stuttgart 1979.
- Schulze, Ernst: Gothisches Glossar. Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Magdeburg 1848. Hildesheim/New York 1971.
- Sievers, Eduard: Tatian. 2., neubearbeitete Ausgabe. Unveränderter Nachdruck. Darmstadt 1961.
- Smyth, Herbert Weir: Greek Grammar. Revised by Gordon M. Messing. Harvard University Press 1984.
- Streitberg, Wilhelm: Die gotische Bibel. Bd. 1. 7. Aufl. Heidelberg 2000.
- idem: Gotische Syntax. Nachdruck des Syntaxteils der 5. und 6. Auflage des Gotischen Elementarbuches. Hrsg. von Hugo Stopp. Heidelberg 1981.
- idem: Zur gotischen Grammatik. 1. *qiman in* und Verwandtes. In: Festschrift für Ernst Windisch. Leipzig 1914.
- Turner, Nigel: A grammar of New Testament Greek. Vol. III. Edinburgh 1963.
- Wilmanns, W.: Deutsche Grammatik. 3. Abteilung. 2. Hälfte. Unveränderter photomechanischer Nachdruck. Berlin 1967 (Straßburg 1909).
- 国原吉之助 : 中世ラテン語入門、第3版、南江堂、東京 1986